

教 育 長 様

校番 043 日彰館 高等学校長

**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る研究開発校  
令和2年度 報告書**

**1 研究の概要**

**研究の目標**  
 探究的な学びを中心とした資質・能力を向上させる学習活動の目標と指導と評価を一体化させ、生徒が自己の成長を自走化させるメタ認知力を身につけることによって、学校全体で育成する「資質・能力」を向上させる。

**総合的な探究の時間等の取組内容**

① 生徒の状況把握及び分析  
 資質・能力ルーブリック評価について、昨年度末の結果と分析を年度始めに、今年度の学期ごとの評価状況を教員間で共有し、指導に生かした。昨年度末の結果については、現3学年の評価結果が低く、3つの資質・能力でレベル3以上の生徒の割合は58%（目標値60%）であった。教員間の共有では、どの生徒がどのレベルなのか、固有名がわかるようにし、個々の生徒が一つ上のレベルになるよう指導していくことを確認し、指導に生かした。

② 育成する資質・能力の設定（共有）  
 学校全体で育成する資質・能力を、生徒が理解しやすくなるように解説を加え、総合的な探究・学習の時間と各教科での授業の振り返りに活用しながら、生徒と共有した。生徒の自己評価に教員がコメントや対話でのフィードバックを与えることを通して、生徒にメタ認知をさせながら学校全体で向上を図った。

③ 資質・能力の育成に向けた各種計画の作成  
 資質・能力の育成を総合的な探究・学習の時間だけに限定せず、教科においても横断的に育成していくため、各教科で単元指導計画と学習指導案を作成し、単元の最後に資質・能力ルーブリックで生徒が評価活動をし、それに対して教員がフィードバックを与えた。また、全学年合同の総合的な探究・学習の時間を実施し、学年を越えて資質・能力の向上を図った。

④ ③に基づく教育活動の実施状況  
 10月から教科で資質・能力ルーブリックを活用した研究授業を実施した。教員を少人数グループに分けその授業を参観し、生徒の自己評価にフィードバックを与えるため、生徒の活動を分担して観察した。事後協議で生徒の活動の様子を共有し、どのようなフィードバック、すなわち評価が適切かを検討した。

⑤ 評価活動（ルーブリック等の活用等）  
 ④の各教科の単元末と総合的な探究・学習の時間の学期末に生徒に資質・能力ルーブリックを用いて自己評価をさせた。そして、それに対して教員がその評価が妥当かどうか評価し、フィードバックを与えた。生徒が自己評価と他者（教員）評価の相違点を受け取ることで、メタ認知力の向上を図った。また、年間評価計画を作成し、いつ、だれが、何を、どのように評価していくのかを校内で共有し、系統的な評価活動を展開した。

⑥ 次年度計画への反映  
 資質・能力の向上が教科学力向上に起因していると実感が十分にできていないという課題があるため、資質・能力を再設定する。そして、どの資質・能力を、どの教育活動で、いつ向上させていくのかを整理している。

**成果**  
 (1) 資質・能力の向上各学期の学習活動と評価活動への取組の結果、全体的に学期を追うごとに、資質・能力の評価は概ね向上した。（目標・指導・評価を焦点化しているため、斜線の部分は評価の対象としていない。）

資質・能力	学年	レベル3以上の生徒の割合 (%)		
		1学期末	2学期末	3学期末
(1) 知識と他者の考えを求める主体性	1学年	31	72	68
	2学年	40	57	72
	3学年	36		76
(2) 多様な意見を受けとめ自らを関わらせる力	1学年		57	65
	2学年		50	53
	3学年		68	73
(3) ヒト・モノ・コトの背景に触れ吉舎で学ぶ意味につなげる志向性	1学年	36		63
	2学年	49		63
	3学年	29	69	68

(2) 振り返りの習慣化

総合的な学習・探究の時間だけでなく、各教科の授業でも資質・能力ルーブリックを活用して目標の確認と振り返りの自己評価を導入したため、生徒がルーブリックの自己評価に慣れた様子を見てとることができた。生徒からは、授業の目標に対して自分の学習の振り返りを重ねることで、成長を感じるといった感想が、教員からは、生徒の理解度や学習状況を把握するのに効果的であるという感想が多くあった。

(3) 対話の促進

資質・能力ルーブリックでの生徒の自己評価に対して教員がコメントを記述することによって生まれる対話、生徒の自己評価と教員の評価のすり合わせの対話、研究授業の事後協議で生徒の固有名を出しながら活動の様子を共有する対話、研究授業を参観した教員と活動を見とった生徒との対話等、資質・能力ルーブリックが関わりを創り出すツールとして機能した。

課題

資質・能力は数値の上では向上したが、それは生徒の自己評価を基本としているため、教員が十分に実感しているとは言い切れない。また、教科の授業でさらに資質・能力を向上させていくためには、教科学力との連動性を高めていく必要がある。今の生徒の実態、目指す生徒像から逆算して、生徒と教員の両方が十分な納得感を持って向上を目指しやすい資質・能力に再設定する必要がある。

次年度の目標（育成する資質・能力）及び取組内容

現行のものをベースとしながら、教科と連動した育成する資質・能力を再設定している。今年度と同じ取組に加えて、いつ、どの活動で資質・能力を育成するか計画を立てる。また、資質・能力の向上がどのように教科学力と連動しているかをデータ化し、校内で共有を図る。教科学力については、各科目の定期試験または単元テストの基礎的・基本的な知識・技能を問う問題と活用問題の正答率、模擬試験の偏差値、検定試験の合格率を参考とし、客観的なデータと資質・能力の関連を明らかにする。